

## 顔寄せ亭

朝の太陽は、鈍色の雲に覆い隠されていた。

低く垂れこめたその雲から、ちらちらと落ちてくる白い粒に、クワールレンは、息を吐きかけた。ふわりと灰色の靄が、小さな白粒を溶かした。

「雪だー！」

マウリンは、両手を上げて粒を受けた。彼女の二つの髪は、白い世界で楽し気に跳ねた。

「イムサ、こっちであっているの？」

そう言ったのは、寒そうに首をすくめるリリだった。

前を歩くイムサは、少し振り返ると、「あってる」と頷いた。

3015番地の見習いたちは、狩りの村の広場へ向かっていた。ドナウト師が、そこへ集合せよと、『二本槍』に手紙を残したのだ。その手紙は、宿主から、朝早く起きたイムサへと手渡された。

「ドナウト師は、なぜ『二本槍』に移らなかったのかしら？」エネーリスが言った。

「ねずみに食われたかったんだ」チャールは言い、自分の外套の袖を伸ばした。

「けど、どつちにしろ、こつちに来て同じだったぜ。こんな虫食いだらけの外套を寄こすんだからな！」

クワールレンは、外套の虫食い穴よりも、かび臭さのほうが気になっていた。もう古いから持っていてもいいと、宿の者から貰ったものだが、動いたびに、つんと漂う黴臭が不快だった。まあ、見習い服一枚でがたがた震えながら歩き回るよりは、だんぜんましだけれど。

広場につくと、重たげな外套を羽織ったドナウト師が、一軒の薬屋の前に立っていた。

「鼠は大丈夫だったの!?!」

マウリンがそう言って駆け寄ったが、ドナウト師は、怪訝な顔をした。

「ねずみ?」

とたん、マウリンを押しして、イムサが割り込んだ。

「今日は、つくりの村ですよね」

「ちょっと、なにすんのよ!」

だが、イムサは無視した。

ドナウト師は、疲れて血走った目で、あたりをきよろきよろしながら、「さ、行くぞ」と、玄関口<sup>エテリセ</sup>へ急いだ。

「最低」

マウリンは、イムサを突き飛ばした。イムサは何も答えなかった。

突然の雪は、どうやらみんなを不機嫌にさせた。狩りをしに魔法陣へ向かう狩りの人たちは沈黙し、チャルーは三度目の鳥便とりびんに目を潤ませた。

だが、イムサが慌てて言った。

「つくりの村へは、馬便でも行けますよ！」

ドナウト師は、振り返りもせず、鳥便とりびんの駅舎へ入った。

「つくりの村へはいかん。次は、師の村へ行く」師は言った。

イムサの顔が強張った。そんな彼を、クワーレンは訝しく思いながら、追い抜いて鳥便とりびんに乗った。

「こういうのは、魔法動物のせいだよ」

師の村に着くなり、マウリンが物知り顔で言った。

「またはじまったわ」とりり。「魔法動物おたく講義が」

「例えば、この雪！」

マウリンは、前を歩くりりの束ねられた髪を引っ張った。「ちよつと！」

マウリンは、髪についた雪をつまんだ。

「春真っ盛りに、大量の雪！ こういうのは、魔法動物が絡んでいるんだよ！」

例えば〈風雨降らしセンフエリアーレ〉とか、〈冬笑フアムズツクい〉とか！ でも、〈風雨降らしセンフエリアーレ〉は、雪じゃなくて、本当は風を降らせるんだよ！」

リリは悲鳴を上げて、マウリンをばしばし叩いた。マウリンは、かっかっかと笑った。

クワーレンは、師の村の雪景色に見とれていた。

青の真中山エイレスイェルアトウワの中腹に立っているにも関わらず、師の村は、立派な石造りの建物で満ちていた。ここまで石を運んできた昔のアベドたちには、感服するしかない。

村の中には、ナクーや竜、そして知性の象徴でもある、ロウリという剣弁の花の彫刻が、いたるところにあった。

ロウリは、地面にもあった。ぴったりはまるように計算して加工された石が、ロウリを幾何学模様にして描いていたのだ。

クワーレンは、先を急ぐドナウト師の背中を見た。これほど立派な村の中で、師の人ドナウトは、とても淋しく見えた。師は、自分の村などどうでもいいように、安堵も誇りも、一度も見せなかった。

広場を通り過ぎ、市街地に入った。ドナウト師は、ずっと口を開かなかった。やがて、一軒の料理屋の前で立ち止まると、師はようやく言った。

「ここで、昼飯をとる」

がっしりとした緑の扉を、ドナウト師は、有無を言わせぬ勢いで開けた。

クワーレンは、雪をかぶった茶色のひさしに書かれた店名を読んだ。

『顔寄せ亭』

「講義はやらないのかしら」真面目なエネルギーが、小声で言った。

けれど、乾酪やにんにく、煮込まれた野菜の香りが漂ってきては、だれもが講義なんかどうでもよくなった。もうすっかりお昼なのだ。寒さでよけい腹をすかせた見習いたちは、すぐさま店に入った。

『顔寄せ亭』は、それほど広くはなかった。思い思いの格好で、師の人たちが料理を食べながら、静かに語り合っている。ぽつぽつと集まりを見せる彼らは、家のようになくつろぎのある店内に、独特な落ち着きと熱をもたらしていた。

「いらっしやい。おお、見習いたちまで！ 外は寒かったですでしょう！ どうぞ中へ」

立派な口髭を生やした太った男が、前掛けで手を拭きながら、愛想よく笑って出迎えた。彼の左胸には、つくりの人の証である、両の手を模った記章が光っていた。

いそいそと見習いたちは外套を脱いだ。ドナウト師は、つくりの人に近づいて言った。

「あんたが、主人のプエツァーか？」

「そうだが？」

「折り入って話したい……」

プエツァーは、その小さな目で、ドナウト師の瞳に浮かぶものを見ようとした。

見習いたちに目をうつす。

「……席は、暖炉の近くがいい。ちょうど空いているからな！ さあ、こっちへおいで」

彼は、見習いたちを案内した。ドナウト師は、ついてこなかった。

「お勧めを作ってきてやるからな。ここで待っていな！」

プエツアーは、暖炉の薪の具合を確かめると、でかい尻を振って去っていった。

「どういう魂胆かしら」リリが声を低めて言った。

「どうって、なにがだよ」とチャルー。

「あのアベドよ」リリは、戸口で立つドナウト師に顎をしゃくった。「おかしいと思わない？ 今日は、ぜんぜん喋らなかつたわ。おまけに、こんなしゃれたお店に連れてくるなんて」

リリは、あたりを見渡した。クワーレンも、椅子の座面に気がついた。本物の生き物の鱗が張られていたのだ。

「蛇の皮だ！」チャルーが叫んだ。

「……ちがう。竜の皮だ」

言ったのは、イムサだった。「夕陽竜の皮だよ」

クワーレンは、触れている凹凸が、突然頑強なものに感じ、思わず座り直した。マウリンも、「りゅりゅりゅ、竜！」と、何度も座面を撫でた。だが、エネーリ

スは、「野蛮よ……」と言って、少し尻を浮かせて、縁に座った。

しばらくして、プエツアーが料理を運んできた。野菜の煮込み汁がたっぷりかった、ベルワノと呼ばれる大きな小麦粉の練りものだった。

「ベルワノ!？」

高級料理を期待していたリリは、失望を顔に浮かべた。エイネーで頻繁に食べられるベルワノは、竜の皮椅子に似合わない気がした。

だが、プエツアーはにこにこ言った。

「そうさ！ 寒い日はこれに限る！ 隠し味を入れているんだが、わかるかな？」

リリ以外の見習いたちは、さっそくベルワノを口にした。

「うーん、レモンじゃないかしら？」 エネーリスが言った。

「レモンなんか入ってねえよ。……あつた！ これだ！ 腸詰め、腸詰め！ これだろ、おっさん！」

「チャルー、それ隠し味って言わないよ」

クワーレンは言ったが、マウリンが、「イワシ！」と叫ぶので、ますますプエツアーは苦笑した。

「おいおい、みんな、まだまだだなあ！ 今のところ、だれも正解じゃないぞ〜?」

リリも、慌ててベルワノを口に入れた。

「ペニヤッツ酒を入れてるでしょ！ ……そして小麦粉は、風味の強い朝焼け麦を使ってる！」

「はっはあ！ 不正解。正解は……」

プエツアーは、たつぷり間をとった。そのとき、誰かが言った。

「愛情！」

知らない声に、みんなはぎよっとして、プエツアーの後ろを見た。

お下げの女がいた。小型犬である豆犬をあしらった鞆を肩に下げている。空色の毛糸服に、厚い生地の筒状衣服―トルモといういでたちだが、それだけでは、どの仕事人が判断できなかった。

「リトウアーラ、答えを言うより、挨拶をしてくれよ！ ようやく本の国から戻って来たんだな！」

プエツアーは大きく腕を広げた。それを、リトウアーラはさつとよけて、近くの席から椅子を一つ引っ張ってきた。

「そんなことより、どーしてこんなところに見習いがいるの！？ ああ、見習い帽子のその白さ。まだなりたてね！ 村回りに来たの？ あ、ベルワノを食べたのね！ おいしかった？ ああ、でも、よくこんな辺鄙な場所にやって来たわね！」

リトウアーラに隣へ座られたクワーレンは、そのお喋りに圧倒された。

「ああ、みんな、彼女は……」

プエツアーは紹介しようとしたが、リトウアーラは、「しーしーしー！」と遮った。

「ずっと本としか喋っていなかったのよ。彼ら、面白いけど、耳に刺激を与えてはくれないの。そこが難点！ だから、少しはお喋りをさせてちょうだいよ！」  
プエツアーは、おやおやと肩をすくめて、大きな腹をゆすりながら去っていった。

「やだ。そんな顔しないで！『変なやつ来た』と思ってるでしょ」見習いたちに向き直って、リトウアーラは言った。

「……ええ、まあ」リリは、上から下まで、彼女を眺めた。

それにリトウアーラは、笑ってリリの手を取って振った。

「大丈夫よ、安心して！ あたしはこう見えて、師の人をやっているから！」

「えっ！ そうなの!?」マウリンは、じろじろ空色の毛糸服を見た。「でも、白い外衣、着てない……」

「ええ、そうよ！ 別に誇示するものではないじゃない？ それはそうと、ここだけの話、あたしずっと暇でねえ！ 図書館にこもりっぱなしだったの。でも、暇ほど新しきを得るのにふさわしいものはないのよ？ 死にそうなくらい暇で

も、何か見つけちゃったら、すぐ一週間は経っちゃうんだから！」

リリは咳払いして彼女から手を離れた。その間も、リトゥアーラは喋り続けた。「あなたたち、狩りの村へ行った？ あそこの魔法陣はほんとに見ものよね！

あたしも昔、感動したわ。デイゴンネーってほんと魅力的。ほんっと、溢れてる。

『デイゴンネーの魅惑 つかんで離さない あなたはもう捕らわれの身』って本、知ってる？ デイゴンネーで話されてる言葉について書かれているの！  
すごく面白いから、ぜひ読んでみて！」

「ええ、なにそれ、変な本！」マウリンは、題名に笑った。

「真面目な話、これ以上わかりやすくデイゴンネー言語のことをまとめた本なんて、ないんだからね。あたしが保証する」リトゥアーラは、大真面目に頷いた。

「デイゴンネーに、言葉なんてあるんですか？」クワーレンは驚いて訊ねた。

「もちろんよ！ 言葉って便利よね。ときに私たちを混乱させるけれど」

リトゥアーラはころころと笑った。「で、なんだっけ？ あなたたちはここでなにをしてるんだっけ？」

「ドナウト師を待ってるのよ」

リリは、呆れてリトゥアーラを睨んだ。

「ああ、そうなの！ ……そのアベドって誰？ 有名？ 私、そういうのに疎いのよ。同じ師の人でもさっぱり……」

「私なんなんだ？」

みんなはぎよつとして、声がした方を向いた。

ドナウト師とプエツアーがやって来ていた。

「食べ終わったか？ なら、今日は一日、ここにいるように。私は少し出かける」

ドナウト師は、リトウアーラをじろつと見ながら言った。

「え、講義はなし?!」マウリンは立ち上がった。

「休講だ。いいから、大人しくここで待っていなさい。それと、外出は禁止だぞ！」

ドナウト師は外套を翻すと、ばん！ と音を立てて、『顔寄せ亭』から出ていった。

見習いたちは、顔を見合わせた。講義がなくなったのは嬉しいが、どうも腑に落ちなかった。

そんな彼らに、プエツアーが言った。

「さあさ。君たち、離れにあるお宝に興味はないか？」

「お宝!？」

マウリンとチャルーが同時に言った。

「ああ。いろーんなものがあって、きつと楽しめるぞ！ リトウアーラ、案内してやってくれ」

「はい」

お下げの女は、「さあ！ 外套を着て、裏口へいくわよ！」と見習いたちの背中を押した。

「あなたは、ここのお客さんじゃないの？」リリが訝しんで言った。

「あら、言わなかったっけ？ ここ、私の家なのよ」

「うっそ！」みんなは声を上げた。

けれど、一人、無言なままの見習いがいた。彼、イムサは、ドナウト師が出て行った戸口を、不安気に見つめた。

裏口の先は、小道の通る庭だった。その向こうにある離れは、冷たく凡庸な雪空を背景に、どっしりと構えていた。色は、くすんだ深い緑色。窓枠は、もとは白だったのが、薄汚れて灰色になっている。建物の周りには常緑樹が茂り、ここと他の敷地とを隔てていた。

「うわ。どこまでがリトウアーラの家なの！？」

小道に行く師の人に、マウリンが啞然として訊ねた。

「もちろん全部よ。あの離れと、それから、店のある建物も。あの林も素敵でしょ？ きのがたくさん生えててねえ！」

「ひ、一人でここに住んでいるの？」エネーリスが驚きで擦れながら訊ねた。

「あははははは！ やあねえ、長おきじゃあるまいし！ もちろん何人かいるわよ」

リトウアーラは、正面の扉へ向かったが、直前で右に折れ、側面の扉の鍵を開けた。

「ここはね、お宝の部屋に直通なの。すごく便利なのよ！」

彼女が扉を開けると、黴と埃の匂いが広がった。薄暗い中に、上へと伸びる階段がある。

リトウアーラは、そばの燭台に火を灯すと、「こっちよ」と言って、階段を上った。

「きったね」

チャルーが、天井にさがる蜘蛛の巣を見て、無遠慮に言った。クワレーンも、埃まみれの手すりに触って、思わず見習い服で手を拭ったところだった。

「まあ、仕方がないのよ。みんな、この築300年の家には、住みたがらないもの」

「300年！？」見習いたちは、ぐるりとあたりを見わたした。

「そうよ。おかげで設備があまり整っていないの。なにもかも昔のままですねえ！  
図書館で過ごしたほうがいいっていうのが、ほとんどのアベドの意見よ！」

階段を上がりきると、突然、一つの部屋に出た。葡萄色の絨毯が敷かれ、四隅

に、物が山のように積み上げられている。窓には半分だけ緞帳が引かれ、あとの半分は、ひし形格子の木枠がはめ込まれていた。

「すごく魅力的な場所なんだけれどねえ！ でも、便所に苔が生えていたら、ちよつとさすがにって思うでしょう!？」

だが、喋り続けるリトウアールに、だれも突っ込んだことを言ってあげられなかった。燭台の明かりで浮かび上がった装飾品の数々に、見習いたちは圧倒されたのだ。

何十色もの織物の山、壺、船の模型、ナクーと竜の石像、大小様々な鳥の剥製、食器、何に使うかわからない錆びた機械、一つ一つ違う模様をした木の枝、ばらばらになった本、傾いた棚、棚、棚、煌めく首飾り、陶器の人形、布の人形、木の人形、金の刺繍がされた豪華な服、羅針盤、時計、照明、木の箱、金属の箱、うず高く積み重ねられた巻物、磨き抜かれた色とりどりの鉱石群、整列する珍しい昆虫

標本……。

「嘘だろ、すっげえ！」

チャルーが、一つの壺に駆けだした。「見ろよ、剣だ！」

彼は壺の中から、自分の背丈ほどもある剣を引き抜いた。

「あらあら、それは練習用の木刀よ！ ある考古学者がくれたものでね……」

「これ水晶玉?!」

マウリンが走って行って、斜めに傾いた棚にある、くすんだ玉に触った。「うっわあ、すっごく綺麗。あれ、なにか見える……?」

「ええ、もちろん見えるわよ! だってそれ、本当に中に入ってるんだから!」

一方でリリは、別の棚の上に、薬液に漬けられた爬虫類の標本を見つけ、「うへえ、きもい」と舌を出した。

「ねえ、ねえ、すごいでしょう?」

リトウアールは、みんなに触発され、目を輝かせた。「これなんかみてちょうだい!」

彼女は、手のひらほどの陶器をもってきた。可愛らしい白い花をあしらった、小さな蓋がついている。

「この中にはね、使い終わった茶葉が入ってるのよ!」

彼女は蓋を開け、底に固まった茶色い屑を見せた。

「汚いにもほどがあるわ……」

リリは言ったが、リトウアールは聞いていなかった。

「これは、アスハリエティク産の輝蜜トロキっていう茶葉でね、この陶器は、五十年前に流行した形なんだけど。つまりこれがここにあるってことは、五十年前にここに住んでいたエイネーアベドが、この茶葉を飲んでいたって証拠になるわけなのよ! ああ、夢があるわよねえ……」

「なあ、俺これ気に入った！　いくらでくれる？」

チャーリーは、木刀を振り回して言った。

リトウアーラは、ちよいと肩をすくめた。

「いいわ。ここにあるものは、ほとんどごみなの。だから、気に入ったのがあれば、持って行ってどうぞ！」

「まじで!？」

チャーリーは歓声を上げ、さらに剣を振った。おかげで近くの花瓶にあたり、盛大に割った。「やっべ……」

「自分の頭を割らないようにね！」おもちゃ箱をあさっていたマウリンが茶化した。

「なにい!？」

「じゃあ、私、図書館へ少し戻らなくちゃいけないから、仲良く過ごしてね！」

ああ、お腹がすいたら、プエツアーに言ってみて！　何かくれると思うから」

彼女は、傍にいたクワーレンに目配せした。

「危ないから、敷地の外には、出てはだめよ」

クワーレンは、よくわからないながらも、こくりと頷いた。

「……わかりました」

「やだ！　敬語はいらないわ！」

リトウアーラは、あははと笑って、階段を降りていった。

見習い帽子を脱いで、クワーレンたちは、この珍しい玩具で一通り遊んだ。昔の遊戯盤を見つけて、でたために決まりをつくって勝負したり、剝製を背の順にして並べたり、水晶を完璧に磨いたりもした。

だが、外が暗くなってきたり、リトウアーラはおろか、ドナウト師も戻ってこないとなると、じわじわ疑問と不安が押し寄せた。

「ねえ、どこ行っちゃったんだと思う？ 帰ってくるのかしら？」

エネーリスが、遊戯盤の上へ綺麗に駒を並べながら、窓の外を見やった。

そのとき、駒が、いきなりばあん！ と弾け飛んだ。マウリンが蹴ってしまったのだ。

「ごめーん！」

彼女は、羽をはたかかせて飛ぶ蝶のおもちゃを追いかけていたところだった。

蝶は、部屋の端で水晶玉を集めて磨いていたクワーレンとチャルーのところ  
で落下した。

「プエツアーのところに行って、なにか貰わない？」

クワーレンは言い、蝶を拾い上げた。

だが、チャルーがそれを、むんずとひったくった。そして、マウリンに向かって放り投げた。

「ほうら、とってこい!!」

そこで二人の小競り合いがはじまった。「あたしをなんだと思ってるの！」

「あ、ねえ、雪合戦しない?！」

突然、床に寝そべっていたリリが起き上がって言った。「夕飯前雪合戦だよ！勝ったアベドが、みんなの夕飯から、好きなものをもらうの！」

「そ、そんなあ！」エネーリスは言ったが、マウリンもチャルーも、そしてクワーレンも、大賛成して階段に駆け寄った。

「肉団子あったら俺のもの！」

「あたし、魚ほしい！」

待ちくたびれて退屈だった時間が、わくわくな時間に変わろうとした、その時だった。

「おい、待て」

いままですっかり黙って、窓辺で本を読んでいたイムサが、険しい顔をして床に降りた。「よく考えた方がいい」

クワーレンは、何も言えず硬直した。

「どういう意味よ？」手すりに手をかけていたリリが言った。

イムサは、齒がゆそうな顔をした。

「……俺たちを、追っかけているやつがいるんだ。あんまり出て行かない方が、いいと思うぞ」

「は？」

途中まで降りていたチャルーが、一段戻ってせせら笑った。「お前、大丈夫かよ。本の読み過ぎじゃね？」

「違う！」イムサは怒鳴った。「俺の話は本当のことだ！ ドナウト師は脅迫されているんだよつ。そのゆすりに、俺たちは使われるんだ！」

空気が凍りついた。だれも身動き一つしない。

「……それ、証拠はあるの？」

リリが、少し笑って彼に体を向けたが、クワールレンは、狩りの村で会った師の人たちのことを思い出し、階段から後ずさりした。『彼は約束を破った……』

「……話すよ」

イムサが、諦めたように暗く言った。「でもその前に、だれにも言わないって、誓ってくれないか。俺も、話すなって言われていたから」

「だれに？」とエネーリス。

「それを、これから話す」

そのころにはもう、みんな階段から離れていた。彼らは、それぞれ顔を見合わ

せた。

「誓うよ」

「主あるじの子スイドに懸けて」

彼らは、大人のアベドを真似て、それぞれ言った。

イムサは、わずかに後悔の色を浮かべた。けれど、小さく頷いた。地面に胡坐を掻いて座る。

そんな彼を囲むようにして、3015番地のみんなは集まった。

「……はじまりは、見習いの村なんだよ。みんなが朝食を買っている間、ドナウ

ト師は声をかけられたんだ。……二人の師の人にさ」